2024 年度 4 月入学　修士課程　一般入学試験・国費留学生等入学試験・学内選抜入学試験（第 2 回）

2024 年度 9 月入学　修士課程　学内選抜入学試験（第 1 回）・海外指定大学特別選考

事前課題

課題文を読んで，2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際，資料や文献を参照し，それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含みます。

設問

課題文は、社会学における「聞き取る」という営みについて述べたものです。筆者の考えをまとめたうえで、日本語教育における「聞き取る」営みに際して留意すべきことは何か、具体的な事例に即して自身の考えを述べなさい。

課題文

「透明人間」にはなれない

社会学で世の中を調べようとするとき、研究者は調べたい現実に「はいりこむ」。また、調べたい現実で「あるものになる」。ほかにも、「聞き取る」という営みをよくする。聞き取るとは、いったい何をどのように「聞き」、どのように「取る」のだろうか。その営みについて、ここでは考えたい。

たとえば、ある町や村、地域の歴史を調べようとするとき、まず考えられるのが文書の形をした資料を調べようということだ。ただ、社会学者が気になるのは、文字の形で残されたものだけではない。というより、むしろ人々がある時代、ある場所でどのように暮らしてきたのか、人々が当時を生きてきた具体的な「生きざま」「思い」「情緒」などを、できるだけ生き生きとしたかたちで知りたく思うのである。

そこで暮らしてきた人々の日常生活や文字に残らない伝承、事件、できごとの記憶、生活の知恵などをめぐり、社会学者は、実際に彼らと出会い、語られる中身、語りくちを丁寧に聞き取っていきたいと考えるのである。

また、人々に苦しみを与える社会問題や、生活で起きている不条理なできごとをなんとか解決したい、とさまざまに運動している人々がいる。

社会問題から受ける彼らの苦しみとは、具体的にどのようなものなのか。同じような経験をしている人々と苦しみを共有し、立ち向かい、乗り越えていくために、どのような生活の論理や情緒を創造しているのか。問題の解決をめざし、どのような運動を展開しつつあるのか。その運動がもつ効果は何か。運動が孕んでいる具体的な問題や矛盾はどのようなものなのか。

社会学者は、社会問題、社会運動をめぐり、さまざまな問いをたてるだろう。

そうした問いの中核にあるのが、問題や運動を生きている人々のさま、なのである。そして、社会学者は、できるだけ多くの当事者と出会い、彼らの語る内容、語りくちに耳を傾けようとする。

また、世の中には、さまざまな少数者（マイノリティ）が暮らしている。

同性愛者、在日朝鮮人、被差別部落の人、外国人労働者、ひきこもりの人など、世の中には、マイノリティとされる人々を一括りにして呼ぶ言葉がある。その言葉には、支配的な文化や価値を生きている人々があてはめた勝手な意味がこめられている。

はたしてマイノリティとされる人々は、こうした言葉や言葉がつくる決めつけに対して、どのように対抗し、せめぎあって生きているのか。あるいはこれをどのようにすり抜け、揶揄(やゆ)しつつ生きているのだろうか。

世の中がもつ差別的なものを考えたいと思う社会学者は、このような問いをたて、マイノリティとされる人々と、彼らが暮らしている現実と出会おうとする。

このように世の中の歴史、構造、問題、差別などを調べようとするとき、社会学者は、当該の現実を生きている人々と出会い、彼らの語りを「聞き取ろう」とする。

ただ、何に関心をもとうとも、「聞き取る」という営みがもつ、決定的に重要な点がある。それは、話を聞き取ろうとする人は、自分が想像しきれないような、あるいは想像を超えてしまっているような経験をもつ他者と具体的に面と向きあうということである。普段あたりまえのように生きてしまっている自分の日常とは、まったく異なる文化や社会、生活を生きている他者と正面から出会うということである。

では、「聞き取る」という営みのなかで、自分は他者とどのように出会っているのだろうか。あるいは他者とどのように出会えばいいのだろうか。

すぐに思いつくのは、自分が「透明人間」になるということだろう。相手の話を聞いているのにもかかわらず、あたかも空気のようにふるまうことができれば、相手は自分を気にすることなく、好きにしゃべることができる。自分も相手の経験をよく聞き取れるはずだ。

しかし、何かイリュージョンでも使わないかぎり、そんなことは実現不可能だ。とすれば、相手の語りを妨げることがないようにかぎりなく「透明人間」に近づく努力をすればいいのだろうか。

なるほど、そうすべきだと思うかもしれない。でもこうした発想、努力は「聞き取る」という営みを考えるうえで、やはり奇妙なものだ。

自然のなりゆきで異なる経験を生きてきた他者とすれちがうのではない。商売上の目的など何か別の目的で相手と相談したり、交渉したりするのでもない。

「聞き取る」という営みは、目の前にいる相手の「生きてきた歴史」「いま生きている固有の経験」を知りたく思い、そうした語りを、他でもない目の前にいる自分に語ってほしいと相手に要請することなのである。

そのような要請がある場で、自分が「透明人間」——姿かたちはまったく相手に見えないけれど、相手からの情報はくまなく吸い取ろうとするマシーン——になろうとすれば、相手はどう思うだろうか。

「あんたは、私の話ばっかり聞きだそうとして、いったい何者なんだ、あんたは私の話をどのように思い、どう聞いているのか、ちょっとは自分のことも話したらどうか」

私だったら、こう思い、「透明人間」になろうとする相手にいらだつだろう。

「聞き取る」という営み。それは、単に相手の話をどのように聞き取るのかということだけが重要なのではない。

それは相手と語り合い、その語りを手がかりとして、相手の「生きてきた歴史」をできるかぎり深く想像し、相手の現実にいたろうとする営みである。

同時に相手にとっては、何のために自分がいま目の前にいるのか、ただ調査目的を知るだけでなく、聞き手がその目的を重要だと考えるより深い〝わけ〟を自分の「生きてきた歴史」を垣間見ることから想像しようとする営みとなる。

「聞き取る」という営みの核心は、相手と私が語り合い、お互いをまなざすという濃密な時間をどのように生きるのか、ということなのである。

好井裕明（二〇〇六）『「あたりまえ」を疑う社会学 質的調査のセンス』光文社、pp.116-120